GAS MUSEUM がす資料館　ギャラリー第69回企画展

～えがく・ほる・する～
「発見！明治の錦絵」展

会期：2013年 10月 5日(土)～ 12月23日(月・振休)

会場：< GAS MUSEUM がす資料館>ガス灯館2階「ギャラリー」

ごあいさつ

GAS MUSEUM がす資料館では、ギャラリー第69回企画展として、2013年10月　5日(土)から12月 23日(月・振休)までの期間、「～えがく・ほる・する～『発見！ 明治の錦絵』」展を開催します。

当館では、幕末明治期の社会情勢や人々の暮らしを知る映像資料として、錦絵を中心とした作品を収集し、展示公開してきました。

１７６５年(明和２)以降に誕生した多色摺の木版画は「錦絵(にしきえ)」とよばれ、以後、数多くの作品が出版されました。時代は下り、文明開化期に製作出版され、開化風俗の紹介や時代の変化を紙上に描き出した作品は「開化絵」と呼ばれ、明治の錦絵の特徴の一つになっています。また海外との交流の中、西洋からの絵画技法や印刷技術がもたらされ、木版画による新たな作品を生み出す人たちも登場しました。

作品には外国人の姿や洋風建築を始めとした、あわただしく移り変わる社会の様子が数多く描かれ、当時の様子を現在に伝えてくれています。

今回の展示会では、所蔵の小林清親「イルミネーション」の復刻版木や摺立順序の展示とともに、開化東京の姿を描いた作品、明治の錦絵の特徴である「赤絵」のほか、版元が自身の宣伝のため制作したチラシなど、明治の錦絵が現在の私たちに伝えてくれる、さまざまな事柄について、30点あまりの作品より紹介致します。

GAS MUSEUM がす資料館

■展示作品一覧

【展示解説】　　学芸員　高橋　豊

錦絵の誕生からその歩み

１７６５年(明和２)頃に誕生した多色摺の木版画は「錦絵」と呼ばれ、幕府の統制の下、喜多川歌麿の美人画、葛飾北斎の「富嶽三十六景」や歌川広重の「名所江戸百景」などの風景画、東洲斎写楽や歌川豊国らをはじめとする役者絵など、さまざまなジャンルの作品が製作されました。

幕末の開港以降、その錦絵が大きく変化しました。突如登場した開港地の風景や外国人の風俗を取り上げ、より情報を伝える役割に力を入れた作品が登場したことが挙げられます。

作品で主に取り上げられた開港地が横浜であることから、これらは「横浜絵」や「横浜浮世絵」とも呼ばれています。

1）英吉利国

歌川広重(二代)　　1860年(万延 元)

2）横浜亜三番商館繁栄之図

歌川広重(三代)　　1871年(明治　４)

明治期の錦絵

西洋からの影響をうけ、表現方法や画題などの変化はあるものの、江戸時代から変わらず、「風景画」や「役者絵」、「美人画」、「戯画」などの作品も製作されました。明治期ならではの作品としては、ありのままに史実や人物を取り上げた「歴史画」、宮廷の女性たちや軍装の政府高官を描いた「御所絵」、戊辰戦争や西南戦争など、戦局の様子を画題に取り上げた「戦争絵」、内国勧業博覧会や、新築した役所や橋など、催し物や公共施設を描いた、報道性に重点を置いた作品などが挙げられます。

3）東都築地保互留館海岸庭前之図

歌川国輝(二代)　　1868年(明治 元)

4）第一大区京橋商店煉瓦石繁栄図

歌川国輝(二代)　　1873年(明治　６)

5)東京海運橋第一国立銀行之全図
並ニ近円の市中一覧の図
歌川芳虎　　1876年(明治 9)

6)大日本内国勧業博覧会　製糸器械之図
歌川国明(二代)　　1877年(明治10)
7)東京名勝開化真景　新橋鉄道
長谷川竹葉　　1877年(明治10)
8)扶桑高貴鏡
楊洲周延　　1886年(明治19)

光線画

作品【9】は小林清親(こばやし きよちか)の横大判錦絵で、現在は「光線画」と呼ばれています。
特徴は、ガス燈や日、月などによる光の変化を、木版画で再現し、色版や摺の技法を駆使して光の変化を表現した所にあります。
絵師、彫師、摺師そして企画から販売までを束ねる版元の総合力の結晶になります。
「光線画」の担い手としては、弟子の井上安治(いのうえ やすじ)や、清親の作品に影響を受けたと考えられる小倉柳村(おぐら りゅうそん)などがいます。

9)東京銀座日報社
小林清親　　1876年(明治 9)
10)新吉原夜桜景
井上安治　　1880年(明治13)

11)浅草観音夜景
小倉柳村　　1880年(明治13)

現在に繋がる木版画

明治２０年代以降、海外から伝わった石版画や銅版画の登場により、木版画に陰りが見え始め、明治３０年代以降は、絵師、彫師、摺師の分業制による従来の木版画作品は数を減らしてゆきました。
大正期に入ると、創作的な作品を、伝統的な技法により製作する「新版画」運動や、絵師自らが下絵から版の製作、摺に関わる「創作版画」の動きが起き、独自性、芸術性を追求した版画が製作されました。
その流れは現在までも続きます。一例として、明治開化期を回顧する題材を多く手がけた、川上澄生の作品を紹介します。

12)瓦斯燈いろいろ
川上澄生　　1963年(昭和38)

順序摺(じゅんじょずり)

多色摺の木版画である錦絵は、版元が中心となって、絵師、彫師、摺師をまとめて出版されます。
版元の企画に合わせて絵師が「下絵」を描き、その後「版下絵」を裏返して版木に貼り、彫師が「主版(おもはん)」を製作します。「主版」に版がずれないための位置合わせとして「見当(けんとう)」をいれ、「校合摺(きょうごうずり)」を元に色数分の版木(色版)を製作します。
色版が完成すると、摺師が馬連(ばれん)を用いて、和紙に主版から色版を摺り重ねて錦絵を製作します。
紹介する、小林清親「イルミネーション」(復刻・復刷版)は、十七版の版木を復刻し、摺り順序がわかるように製作しました。
復刻し、使用した版木とともに、錦絵の製作過程をご覧ください。

13) イルミネーション (復刻・復刷版)
順序摺および版木
小林清親　　年代不詳

校合摺(きょうごうずり)

絵師による下絵を元に、まず製作される版が主版(おもはん)で、作品の輪郭線(黒線)が彫られた版になります。この版の元に、位置合わせに用いる見当(けんとう)を入れた校合摺が、製作に用いられる色数分摺られます。その後絵師によって「色さし」がされ、色版の版下となり版木が製作されます。
実際は予備分を含め校合摺は摺られたようで、昭和初期の作品ではありますが、展示作品のように校合摺が現在まで伝わることがあります。

14)東京風景　日本橋(校合摺)
ノエル・ヌエット　1936年(昭和11)
15)東京風景　日本橋
ノエル・ヌエット　1936年(昭和11)

彫師

彫師の技は、江戸時代より高度な技術を研鑽してきた結果、1mmの幅に5本の線を彫るまでに到達し、明治の錦絵製作にも活躍しました。
版木には桜の板目(年輪が山型に見えるよう加工した板)が材料として利用され、「板屋」と呼ばれる専門業者から仕入れました。
彫師の名前が作品の中に記述されはじめたのは、弘化・嘉永のころ(1744～54)からで、幕末から明治の錦絵には、作品の中に刻印された名前をいくつも見ることが出来ます。
展示品の月岡芳年の作品に見える「和田彫勇」こと、和田勇次郎、河鍋暁斎の作品を多く手がけた「彫銀」こと、浅井銀治郎、小林清親の作品に「彫英吉」「彫刻英吉」の名を残す、井上英吉など、さまざまな彫師の名前が、当時の作品より見ることが出来ます。

16)風俗三十二相　にくらしそう
月岡芳年　1888年(明治21)

版元

版元とは錦絵などの作品を製作出版するにあたり、作品を企画し、絵師への注文から版木の製作、摺、販売までをとりまとめる、製作の要といえます。
展示作品は明治初めの代表的な版元の一つ、「大黒屋　松木平吉」が自身の宣伝のために製作したチラシ2点になります。
作品【17】には、歌川豊宣、井上安治、歌川国明(二代)、豊原国周らの小作品とともに、『「内国勧業博覧会」で賞状を賜り、「猫の絵」は髣髴(よく似ている)として…』と記され、1877年(明治10)に開催された第一回内国勧業博覧会に出品した、『小林清親「猫と提灯」』のことについて紹介していると考えられます。
作品【18】では自身の経歴や営業品目と合わせ、中央の紅絵売りの姿の上に、1890年(明治23)に開催された、第三回内国勧業博覧会で授与したメダルが描かれており、共に博覧会で版元自身が手がけた作品が認められたことを、大きく取り上げて紹介しています。
17)引札　大黒屋　松木平吉
年代不詳
18)引札　大黒屋　松木平吉
1890年(明治23)

赤絵

海外に門戸を開くまでは、錦絵を製作するため使用された赤色の顔料は、植物の紅花から作られる「紅」、「朱」(硫化水銀:HgS)や「丹」(酸化鉛:Pb3O4)など鉱物に由来する自然原料から作られました。
高価な顔料であるため、赤色は気軽に使用できるものではありませんでした。
しかし海外から安価な赤色の化学染料が伝わると、作品の中でこぞって赤色が使われるようになりました。作品名や作者名の背景を始め、空や地平線との境を赤色で描き、刺激的な色使いをした作品は「赤絵」とも呼ばれました。

19)東京新富座真図
安達吟光　1884年(明治17)
20)開化廿四好　時計
豊原国周　1877年(明治10)

油絵を木版画で

「光線画」を手がけた小林清親は、西洋画の技法を木版画に応用し、一歩踏み出して油絵を意識した作品も手がけました。
作品【21】は、鴨のふくよかな丸みと羽根の微妙な色の変化を、すこしずつ色の異なる短い線を重ね合わせることで表現しています。一方背景に見える枯れ蓮は単調な色調で描かれ、鴨の姿を際立たせています。
作品【22】の2枚続きの作品は、画面中央の大木を中心に、鷲と猟師との一瞬の風景を描いています。渓流の岩や背景の茂み、水面のほか、生き物たちの毛並みの表現などに、細い線を多用して描く一方、大木や水面は色を重ねて表現することと合わせ、作品に質感を与えています。

21)鴨と枯蓮
小林清親　1879年(明治12)
22)鉄砲打猟師
小林清親　年代不詳
23)東京諸官省名所集(上)八代洲町弐丁目
(右)海運橋第一国立銀行(左)開成学校
歌川広重(三代)　1876年(明治 9)

24)築地海軍省於　繰練場風船御試之図
歌川広重(三代)　　1877年(明治10)

改印（あらためいん）

江戸時代、版元は江戸町奉行の管轄下にあり、改印は幕府による検閲の証として捺されました。1791年(寛政3)頃より始まり、1875年(明治8)9月3日に明治政府から新出版条例が発布され、出版物に発行年月日が明記されるようになるまで続いた制度になります。改印の移り変わりは、石井研堂氏による著書「増補改訂 錦絵の改印の考證」(1932年)に整理体系化されています。

錦絵大判1枚の作品【25】には、改印が作者名の上にあり、印を読み解くと「亥九」と読め、「十二支と月」を組み合わせた印から、「亥」年に当たる1875年(明治8)9月と読み取れます。

一方、錦絵大判2枚続きの作品【26】では、「明治11年5月27日」(1878年)と、具体的な発行年月日が記されています。

25)東京眞景図絵　する賀町三ツ井組
歌川広重(三代)　　1875年(明治　8)

26)東京名所図会　する賀町三ッ井銀行
歌川広重(三代)　　1878年(明治11)

作品の寸法

錦絵の寸法は、産地や時代により変化はあるものの、「大奉書」(おおぼうしょ)と呼ぶ、約390mm×約530mmの大きさの和紙が基本になります。

基本となる錦絵のサイズは、大判(おおばん)と呼ばれる約390mm×約265mmになり、大判を半分にしたサイズは中判(ちゅうばん)、大判を4等分したサイズが四つ切判(よつぎりばん)と呼ばれています。中判や四つ切判の作品は、大判2面付、4面付で製作された後に裁断されます。

展示作品は、同じ作者による同じ構図の作品を、大判と四つ切判と大きさを違えて製作されたものになります。作品サイズとともに表現方法の違いについてもご覧下さい。

27)浅草橋夕景
井上安治　　1880年(明治13)

28)東京真画名所図解　浅草橋之景
井上安治　　1884~89年(明治17~22)

29)大日本東京　吾妻橋真画
井上安治　　1887年(明治20)

30)憲法発布式大祭之図　大日本東京　吾妻橋真画
井上安治　　1889年(明治22)

おもな参考文献

原色 浮世絵大百科事典 第三巻　日本浮世絵協会編
(株) 大修館書店　1982年

浮世絵の基礎知識
小林 忠　大久保純一　至文堂　2000年

資料による近代浮世絵事情
永田生慈　(株) 三彩社　1992年

浮世絵の見方　松井英男　(株) 誠文堂新光社　2012年

明治版画史　岩切信一郎　(株) 吉川弘文館　2009年

GAS MUSEUM がす資料館　企画展ご案内郵送申込について

ご来館ありがとうございます。　これから3ヶ月ごとに開催されます、「GAS MUSEUMがす資料館 企画展」のご案内はがきの郵送をご希望の方は、 官製ハガキに　①氏名　②連絡先住所　③年齢　④電話番号　⑤感想・意見　⑥今後希望する企画展、をご記入の上、下記の住所までお申し込みください。

次回より約 1年間、毎企画展ごとにご案内ハガキを無料で郵送します。

(ハガキ持参で来館された方は、そのまま継続して登録されます)

〒187-0001東京都小平市大沼町 4-31-25 GAS MUSEUMがす資料館「ご案内ハガキ」係
TEL(042)342-1715 FAX(042)342-8057

《 当館のお客様情報〈 個人情報〉は、当館イベント運営に必要な業務を含め、 当館に関連する企画、 及びサービスのご案内のために使用いたします。》